

学内広報

2026.9.24

no.1610



数理学研究科・玉原国際セミナーハウス（絵：平地健吾）



6年間の休館を経て
ついに再開へ！

→p.2

沼田の森に佇む研究合宿拠点

玉原国際セミナーハウスが再開

2027年の開門に向けて工事中

赤門の改修現場を覗いてみた

沼田の高原に佇む数学・数理科学の研究合宿拠点

玉原国際セミナーハウスが再開



群馬県沼田市の玉原高原には、数理科学研究科が2005年から研究・教育に活用してきた合宿施設があります。コロナ禍の影響で2020年から休館していましたが、関係者の皆さんの尽力が実を結び、本格再開への道が拓かれました。8月4日に現地で行われた開所式の模様と、豊かな自然に包まれたロッジの様子を紹介します。

日本の数学系研究合宿の本場

開所式は現研究科長の辻雄先生による挨拶で始まりました。辻先生は、特に数学の分野では、宿泊型施設での合宿が新しいアイデアや共同研究を生む源泉とされてきたことを紹介。滞在型の環境で知られるドイツのオーベルヴォルフアッハ数学研究所のような施設を日本にもという機運が2000年頃から高まり、研究科として関係各所に働きかけた結果、森林文化協会からロッジを譲り受ける形で2005年に始まったという当施設の歴史を概観しました。2007年に開催した研究集会に海外から参加した研究者には今も親近感を覚えており、寝食をともにする交流の価値を実感すると辻先生。第5代研究科長の坪井俊先生から明かされた、大きなプロジェクトの際は沼田の霊峰として知られる迦葉山かしょうざんの大天狗に祈願してきたとの逸話を踏まえ、今後も大天狗に見守られながら運営を進めたいと語りました。

続いて登壇した相原博昭理事は、国立大学法人化から間もない時期の開所だったことに触れ、短期的成果が求められた当時の改革は、長い時間軸を要する分野には逆風だったかもしれないと指摘。コロナ禍以降に閉鎖を含めた検討を余儀なくされた点を大学本部の財務責任者として詫びるとともに、社会課題の構造を記述・解析する言葉として数学がますます重要になると指摘し、施設が全学の研究教育を支える基盤として発展することへの期待を述べました。

市最大の行事「沼田まつり」と日程が重



なってしまった星野稔市長の代理で登壇したのは、沼田市の武井昭彦観光交流課長。人と自然が触れ合う街という理念を象徴する玉原の施設が教育研究の場として再開されることを喜ぶとともに、研究科が地元の中高生向けに活発なアウトリーチを進めてきたことへの謝意をお示しいただきました。

「黒い森」より明るい玉原の森

続いて、副研究科長として施設再開に奔走してきた小林俊行先生が登壇。施設の存

続をめぐって、研究・教育拠点としての価値と将来の持続性についての議論が重ねられた末に再開が決定されたという経緯を振り返り、「こうして開所式を迎えたことに感激している」と語りました。オーベルヴォルフアッハのあるシュヴァルツバルト（黒い森）は針葉樹が多くて暗いが玉原高原は広葉樹のブナが多くて明るいこと、研究のアイデアを泊まり込みでぶつけ合うミッションは両者に共通であること、しかし予算には大きな隔たりがあることを紹介。

● 開所式・昼食会に
登壇した皆さん ●





玉原を若手鍛錬の場として十数年間使ってきた小林先生は、早朝に始めた勉強会が翌日の夜明けまで続く合宿生活の実例を引き、森の中で雑念を払って数学を考える時間には教室や自宅で考えるのとは違う価値があり、多くの方々に明るい森に包まれながらの探求を続けてほしいと語りました。

第2部の昼食会では、3人の歴代研究科長が登壇しました。第4代研究科長として2005年の開所式を迎えた桂利行先生は、当初は別のエリアも候補だったが、玉原を

見学して惚れ込んだ、と当時を回想。開所式に参加した小宮山宏総長（当時）が、ゴードン会議のように寝食をともにして共同研究できる施設として本部が支援しないとイケないと話し、自ら強力な支援者を見つけてくれたとのエピソードを紹介しました。

解体の危機を乗り越えて

第7代研究科長としてコロナ禍下の休館に立ち会った河野俊丈先生は、谷口数学国際シンポジウムの例を出し、他分野に比べ

れば少額でよいものの支援はやはり常に必要だと話しました。玉原はときに異分野との交流機会となってきたことにも言及。物理学や天文学の若手と数学の若手が合宿すると、最初は全然話が通じないのに3日もたつと話がどんどん噛み合って新展開が生まれていた、と合宿の意義を語りました。

最後に登壇したのは、前研究科長の平地健吾先生。副研究科長時代に玉原を担当し、施設の処遇について構成員のアンケート結果をまとめたり解体の見積を取ったりした結果、一時は解体する選択肢に傾いていたものの、研究科長に就任して小林先生が副研究科長となったのを機に路線変更を決意し、じわじわと周囲の説得を進めたとのこと。沼田市と協力して運営を安定させていくと呼びかけて、会を締め括りました。

研究科内での試用を経て、2027年度には全学に使用機会を広げる予定の玉原国際セミナーハウス。続報をお待ちください。



①開所式で開会の挨拶を述べた辻雄 数理論科学研究所科長（第11代） ②本部を代表して挨拶を述べた相原博昭 理事・副学長 ③星野稔 沼田市長の来賓祝辞を代読した武井昭彦 沼田市経済部観光交流課長 ④閉会挨拶を述べた小林俊行 副研究科長 ⑤昼食会で乾杯の挨拶を述べた桂利行 第4代研究科長 ⑥挨拶に登壇した河野俊丈 第7代研究科長 ⑦挨拶に登壇した平地健吾 第10代研究科長

連絡先／数理論科学研究所総務チーム Tel：03-5465-7001

ウェブサイト：https://www.ms.u-tokyo.ac.jp/tambara/



赤門、令和の大改修が進展中

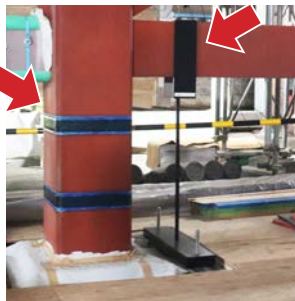
工事期間中唯一となる
学外向け現場見学会を実施

旧加賀屋敷
御守殿門

9月5日～6日、赤門改修工事現場見学会が行われました（主催：本部施設企画課、本部ディベロップメント課）。卒業生、近隣の皆さん、教職員を対象に、これまで仮囲いに覆われていた赤門工事の現況をお知らせする貴重な機会として企画されたもの。改修の監修を務めている研究者、設計・監理の担当者、施工会社の工事長という3人のエキスパートが解説を担った報道陣向け見学会（5日午前）の様子を、いましか見られない工事中の写真を中心にお知らせします。



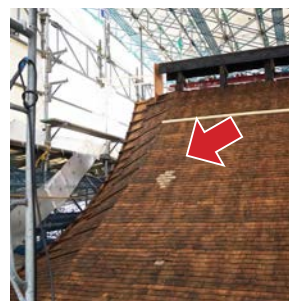
構内側から見た現場



控柱の根継ぎ部を補強する炭素繊維（青黒色）と、地面下に埋めた鉄筋コンクリートの錘と門をつなぐ引張材の金物（黒色）。



耐震診断により番所でも地震に対する耐力不足が判明。構造用合板を内部に設置して補強するため、壁を解体しています。



屋根の下地となる薄板（土居葺き）。ほぼ健全でしたが、降棟鬼瓦の下などに少し傷みがあり、番所の古材で補修しています。



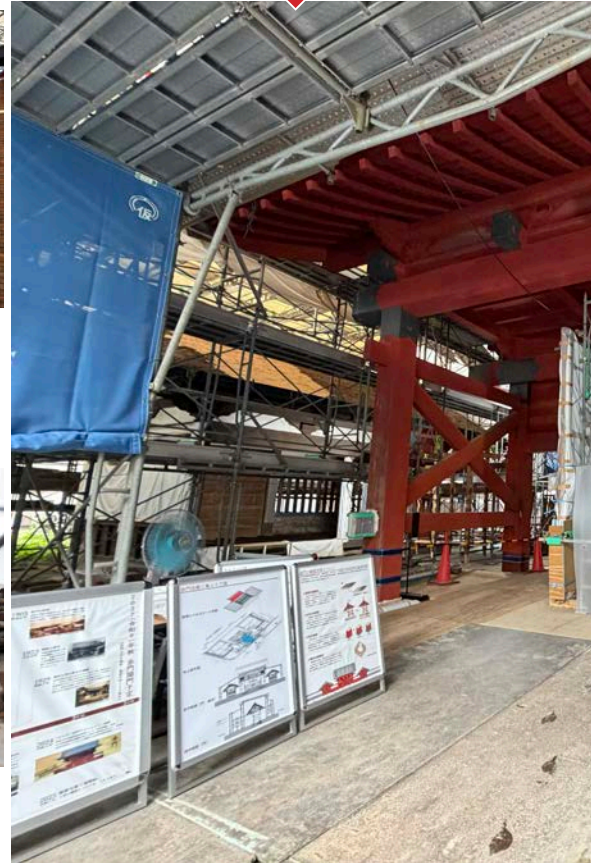
番所から延びる袖堀は控柱の腐朽・劣化が著しいため、板金追加も含めた検討を行っています。



後世の人にいつの改修で追加された部材なのかを伝えるため、改修年の焼印を刻された木材。



門と番所で使われていた釘類を分類して整理。検査して問題がなければ再利用されます。



3人の専門家が現場で解説

当日の午前はいいにくの空模様でしたが、事前に申し込んでいた報道陣約20人が赤門前に集合。通常は工事関係者しか入れない仮囲いの中をヘルメット姿で進み、解説を受けながら工事の現場を見学しました。

今回の改修を監修する工学系研究科の海野聡先生は、将軍家の姫を迎えるための御守殿門として建てられた赤門の沿革を解説。御守殿門は姫の逝去を機に壊されるのが常

だったものの、溶姫は明治維新後もしばらく存命だったため、取り壊しを免れて時代をつなぐ重要な役割を担ったのが赤門であると話しました。過去に4回行われた改修についても概説し、文化財では過去の修理の痕跡自体に価値があることを紹介。多くの人が通行する大学の門として安全性の確保は必須だが、かといって鉄骨を入れるわけにはいかず、文化財としての価値と現代に見合う安全性を備えるために、慎重に改修方法を検討してきたと語りました。

屋根と錘と柱と番所が肝に

続いて、文化財建造物保存技術協会おもりの江見歩さんが、屋根の軽量化、錘の設置、柱の補強、番所の耐震化の4点に整理して、今回の改修内容を説明しました。土で瓦を固定する「土葺き」では屋根が重くなるため釘などで瓦を固定する「空葺き」に変更すること、風や地震による転倒を防ぐため学内側の地中にコンクリートの錘を埋めて鋼棒で柱脚を下に引っ張る手当てを施すこ



本郷通り側から見た現場



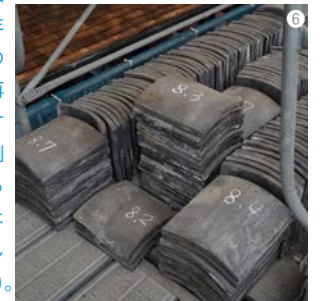
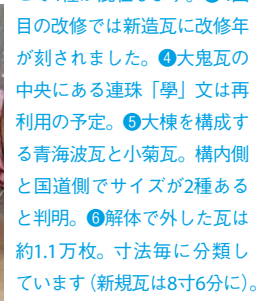
仮囲いの内側（9月5日現在）

と、過去の改修で行われた柱の「根継ぎ」部分を炭素繊維で補強したこと、番所の土壁をやめて構造用合板の枠を入れることなどを解説。昭和の改修で外された明治期の部材に残る棟梁名の墨書を初めて見て、当時の現場の息遣いを感じたとも話しました。

その後、一同は仮設足場の上階へ移動し、工事を司る清水建設の尾形晃弘さんによる屋根回りの解説を傾聴。工事長は、建物を解体してわかったこととして、「土葺き」だが瓦の中央部にだけ土を盛る「筋葺き」



①軒丸瓦の文様。創建時の門には全て徳川家の三葉葵文、番所・塀には汎用文の連珠巴文が使われました。明治の改修を経て連珠「學」文が増え、関東大震災後に門・番所は全て前田家の剣梅鉢文に。②三葉葵文には陽刻（葉脈が凸）と陰刻が。仕様の小異をあわせて4種が混在します。③4回目の改修では新造瓦に改修年が刻されました。④大鬼瓦の中央にある連珠「學」文は再利用の予定。⑤大棟を構成する青海波瓦と小菊瓦。構内側と国道側でサイズが2種あると判明。⑥解体で外した瓦は約1.1万枚。寸法毎に分類しています（新規瓦は8寸6分）。



⑦赤門のこれまでの歴史と文化財としての見どころについて解説した工学系研究科の海野聡准教授（日本建築史・文化財保存）。⑧工事の設計・監理を担う文化財建造物保存技術協会の江見歩さん。国道側と構内側で青海波の数が違うことが今回の解体で判明したと紹介しました。⑨工事長を務める清水建設の尾形晃弘さん。安田講堂大改修でも工事長でした（→本誌1464号参照）。

赤門をくぐれなかった代の卒業生たちも現場を見学



9月5日午後と6日には、赤門が閉鎖された2021年2月以降の卒業生を含めた見学会を実施し、卒業生（本年度卒業予定者を含む）117名が参加。「門を通れただけ

でも嬉しかったのですが、歴史の解説を聞いた上で家紋入りの瓦など普段は近くで見られないパーツを間近で観察できたのが興味深かったです」「歴史のことを全然知らなかったのですが、深い意味がある場所だとわかりました」

などとコメントしてくれました（実はp4-5を担当したカメラマンも同時期の卒業生でした）。



になっており、過去の改修でも軽量化の工夫がなされていたこと、瓦の下地である薄板（土居葺き）は非常に状態がよかったことなどを紹介。現代では入手が困難である良質なサワラ材が使われており、問題がない部分は防腐処理を加えて今後も使い続けていく方針だと語りました。

今回の改修では漆の塗替えは一部のみのため、見た目はほぼ改修前と同じですが、より安全でたのしい存在に生まれ変わる赤門。工事は2027年秋に完了の予定です。

教養教育の現場から

第77回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

日本と中国の学生が組になって互いの現場を体感

／LAP(リベラルアーツプログラム)の文化研修プログラム「敦煌」「深思北京」

20年来の交流あつての新研修

白 昨年度、教養教育の新たな取り組みとして文化研修プログラム「敦煌」を実施しました。今回は専門性の高さから東洋文化研究所の塚本磨先生（中国美術史）にもご協力いただき、美術史を専攻する学生にも公募を行いました。敦煌は極めて深い歴史を持つ地ですが、この研修の面白さは専門を問わず、現代の観光開発や文化財保護といった社会課題の現場を多角的に体験できる点にあります。

南京大学は以前から敦煌研修を実施していましたが、よりグローバルに発展させたいという狙いがあり、本学とのコラボレーションが実現しました。双方間で築いてきた20年に及ぶ地道な取り組みと深い信頼関係があったからこそ、今回のような充実した国際研修が実現したのだと感じています。

朱 もう一つの柱である交流プログラム「深思北京」も、国際情勢の変化を見据えながら、より実践的な対話の場へとアップデートを重ねています。中国人民大学（RUC）との連携のもと、互いに異なる背景を持つ若者同士が同じ問題意識

を持って深く向き合える工夫を取り入れました。実地体験と丁寧な議論を組み合わせることで、固定観念や表面的なイメージを削ぎ落とし、等身大の言葉で理解し合える体験を生み出しています。

白 どちらのプログラムでも大切にしているのは「現場で体感すること」です。自分から足を運ばなければ感じ取れないことが確実にありますから。時にはぶつかり、喧嘩をして初めて打ち解けるような泥臭いプロセスも重要ですが、現代の学生はそもそもぶつかることすら避けがちです。だからこそ、自分の世界を少しずつ広げられるような「きっかけ」が必要です。もちろん、これは私たちだけの力では成り立ちません。現地でサポートしてくださる方々の深い協力や信頼関係があつて初めて実現できることです。

まずは事実を知ることから

よく「相手の立場に立って理解する」と言いますが、そもそも、他者を完全に「わかる」ことは不可能です。安易に「理解した」と言ってしまうのが一番危険で、「わからないけれど、少しでも近づきたい」という姿勢を持ち続けること。理解



国際連携部門

白 佐立
特任准教授
朱 芸綺
特任助教

することよりも、まず事実を「知る」と、そして「そこにそういう状況や思いがある」とそのまま受け入れることが重要なのだと思います。

朱 価値観がすべて一致する必要はありません。最近をよく共生という言葉が使われますが、単に同じ空間にいただけでなく、中国語でいう「共事（共に事を成す）」という感覚がしっくりきます。相手を完全に理解してから動くのではなく、共にプロジェクトやフィールドワークを進める過程で互いの理解が更新されていく。そうした「共事」から生まれる学びを、これからも大切にしていきたいですね。

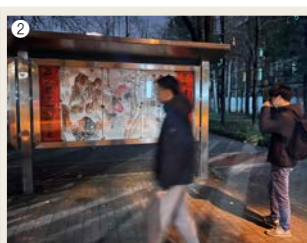
白 研修が終わったからといって、対話や関係性を完結させてしまわないでほしい。実際、プログラム終了後も参加者同士の交流は長く続いていて、中にはそこから結婚に至った学生もいるほどです。現場で得た違和感や気づきを携え、自分自身や他者との関係の中でずっと問いかね、考え続けてほしい。その姿勢こそが、これからの時代を生きる学生たちにとっての真の学びに繋がっていくはずだ。



2025年8月に南京大学・廈門大学と共同で実施した文化研修プログラムの報告集「敦煌 Dunhuang」。本学の参加者5名による見聞記と3大学の学生の写真から構成されています。



研修の様子
を伝える
LAPの
Instagram



「深思北京」プログラムでは東大とRUCの学生ペア6組が各々の都市やキャンパスを歩いて「写ルンです」で気になる日常を記録し、意見を交換しました。①団地で伝統民俗芸能を練習する子どもに遭遇し、体験させてもらう学生。②キャンパスの掲示板に注目する学生。③早朝に地域住民が行う広場ダンスに出くわし、学生たちも参加。④活動で気づいたポイントをキャンパスの芝生で討論。

UTokyo Brand Studio 実験中!

第8回
工学系研究科博士課程3年 山田江里子

作りながら考える

——ブランドスタジオでの1年

もともと、心を動かされた瞬間を切り取るのが好きで、写真や文章といった創作活動をするようになりました。それがきっかけで、サークルの広報担当としてSNS運用や動画・写真撮影に携わるようになり、その後も学科の学園祭展示や駒場生向けの講演、学部広報や中高生向けイベント、動画・冊子制作、女子学生向けアウトリーチなど、学生の立場で大学のPRに関わってきました。活動を通して、部局広報では扱いにくいテーマや大学全体を横断する企画にも関心を持つようになり、昨年度からブランドスタジオに参加しています。

ブランドスタジオは、いわゆる講義のような「学ぶ場所」というより、「作る場所」でした。大学公式Instagramの卒業式・入学式リール動画の撮影・編集や、学園祭・サークル紹介投稿の制作、『学内広報』のインタビュー撮影などを担当したほか、グッズ企画のアイデア出しやブランディング会議への同席、学生スタッフの運営にも関わりました。

活動を通して感じるのは、学生が参加する価値は制作技術だけではないということです。駒場生時代から博士課程までの9年間の学生生活から生まれる視点は、自分にしか持てません。だからこそ、「自分だから出せるアイデアは何だろう」と考えながら活動しています。好きが高じて執筆した長文キャンパス紹介ブログや、息抜きに描きためた研究生活4コマ漫画、大学周辺のグルメ情報など、趣味で続けてきたことが活動に活かせる場面も多くあり、学生有志による五月祭企画では念願だったキャンパス紹介冊子を制作しました。

ブランドスタジオでの活動は、仮説を立て、実験し、振り返りながら前に進む研究活動にも少し似ています。個性豊かな学生スタッフや職員の方々と協力しながらの試行錯誤こそが、この1年で得た最も大きな学びでした。9月からは第二期生も加わります。これからも自分なりの視点を大切にしながら、のびのびと活動を続けていきたいと思っています。



↑入学式でInstagram撮影の合間にイチ公と記念写真 → 本誌1609号の特集記事ではパラ陸上の学生アスリートを撮影



#WeChange Now

第21回 ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

「Tokyo Pride 2026」にて IncluDEブースを出展

2026年6月6日(土)・7日(日)の2日間、代々木公園イベント広場で開催された「Tokyo Pride 2026」に、東京大学多様性包摂共創センター(IncluDE)として初めてブースを出展いたしました。

Tokyo Prideは、SOGIE(性的指向・性自認および性表現)の多様性への理解促進と、LGBTQ+の権利擁護を目指して毎年開催されている大型イベントです。今回の出展では、IncluDEの組織や取り組みの発信に加え、他大学とのネットワーク構築や、学外の皆さまとの交流を深めることを目的としました。

当日は、IncluDE設立の背景や組織体制(各オフィスの役割・連携)をはじめ、SOGIE多様性に関するイベント・研修実績、指導・助言プロジェクトチームの紹介パネルを展示しました。さらに、IncluDE関係教員によるジェンダー関連の著書や講義資料、メッセージも併せて紹介しました。

初出展となった今回は、在学生や卒業生をはじめ、2日間で200名を超える方々にお立ち寄りいただきました。来場者からは「センターの存在を初めて知った」「学生時代にできてほしかった」といった声のほか、「『性的指向と性自認の多様性に関する学生のための行動ガイドライン』が素晴らしい」「今後のイベントに参加したい」「さらなる発信に期待している」といった温かいご意見や応援の言葉を数多くいただきました。

IncluDEの取り組みを発信するだけに留まらず、学内外の多くの方々と直接言葉を交わし、新たな繋がりを築く大変有意義な場となりました。

本取組は、東京大学が2022年度より行っている「UTokyo男女+協働改革#WeChange」事業におけるDEI(ダイバーシティ、エクイティ、インクルージョン)に関する意識啓発の一環としても実施しています。今後も、本学におけるダイバーシティ&インクルージョンのさらなる推進を目指し、継続して取り組んでまいります。

(IncluDE DEI共創推進戦略室 特任助教 金 智慧)



「Tokyo Pride 2026」のIncluDEブース

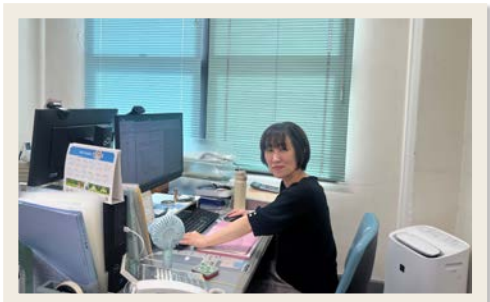
ワタシのオシゴト 第244回

RELAY COLUMN

病院管理課管理総括チーム
主任

尾花道子

伝票の山からペーパーレスへ！



管理総括での業務風景

病院の魅力は、日本最高水準の医療・研究・教育が集まる大学病院で、多種多様な業務に携われることです。

私が所属する管理総括では、会計監査に関する業務を担当し、会計伝票の確認や請求書発行、入金処理などを行っています。特に年度末は多くの伝票が集中し、目の前に積み上がった伝票の山に圧倒されることもあります。しかし、日々の業務を進めるうちにその山はなくなり、また新たな山が現れます。そんな慌ただし毎日、この仕事ならではのやりがいの一つです。伝票の山を見るたびに「今年も春が来たな」と感じるのは、管理総括ならではかもしれません。忙しい時期もチームや他課の皆さんと協力して乗り越えることで、一体感や達成感を味わえることが大きな魅力です。

今後は新システム導入によるペーパーレス化が進む予定ですが、新たな業務環境への変化も楽しみにしています。



管理総括のメンバー

得意ワザ：ダブルチェック

自分の性格：コツコツ取り組む性格です

次回執筆者のご指名：池田理紗子さん

次回執筆者との関係：世代を超えた同期

次回執筆者の紹介：笑顔と優しさが魅力的な方です！

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第45回

本部社会連携推進課
体験活動推進チーム

西村玲菜

ホームカミングデイは「FSマルシェ」に！

この「FSレポート!」では、本学学生を対象とした正課外プログラムであるフィールドスタディ型政策協働プログラムについて、参加学生が各地域での活動内容を紹介しています。これまで日本各地での活動を紹介してきましたが、「そもそもFSとは…?」と思っていた方向けに、プログラムの概要について改めてご説明します。



昨年度の活動報告会の様子

フィールドスタディ型政策協働プログラム、通称FSは、多様な関係者と協働し、社会的課題に果敢にチャレンジするリー

ダー人材を育成することを目的として、2017年度に開設されました。学生はチームを組んで、地域から提示された課題に対して、事前調査・現地活動・事後調査を通じて、解決に向けた道筋提案を行います。プログラム開始から10年という節目を迎える今年度は、過去最多の1都17県にご協力をいただいています。この「FSレポート!」では、現地活動の内容について触れられていることが多いですが、学生たちは自治体担当者と定期的にオンラインミーティングを行ったり、学内リソースを活用して調査を行ったりと、約10か月間、地域にじっくり向き合い、課題解決に向けて取り組んでいます。

10月17日(土)に開催が予定されている、第25回東京大学ホームカミングデイでは「FSマルシェ」として、テ



昨年度の「FSマルシェ」の様子

ント出店を予定

しています。当日は各チームの学生が中心となって、活動内容の紹介や特産品の販売などを行います。テント出店は、昨年度に引き続き今年度が2度目となりますが、昨年度のおよそ3倍となる12チームが参加する予定です。学生たちが地域の方々と連携しながら、当日に向けて準備を進めていますので、多くの方に足を運んでいただけたら嬉しいです。ホームカミングデイ当日は、ぜひ「FSマルシェ」にお越しください！皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

インタープリターズ・ バイブル

第229回

理学系研究科准教授
科学技術コミュニケーション部門

鳥居寛之

科学コミュニケーションと リスクコミュニケーション

科学者を目指す理系の若者は多い。私もかつて、そうした少年の一人だった。一方で、科学の楽しさを人に伝えることが好きで、科学コミュニケーターに憧れる若者も、数はずっと少ないが、一定数存在する。学校や科学館などで、子供向けの実験教室や楽しいサイエンスショーを行う大学サークルも近年活躍している。

しかし、リスクコミュニケーションとなると話が違ってくる。楽しいばかりが科学ではない。時には科学技術の負の側面も含めて、リスク情報を正確に伝えるシビアな情報伝達が社会には必要となる。感染症のパンデミック、ワクチンの効能と副反応、化学物質や食品の安全、そして地球温暖化で激甚化する気象災害や頻発する地震。身の回りにさまざまな危険があふれる世の中において、潜在的な危険性（ハザード）とそれが起こる確率を掛け合わせた「リスク」を正確に説明することは、非常に荷が重い作業である。

そのため、人命に関わりうるリスク伝達に対して、楽しい科学活動のように気楽に取り組めないと思込めるコミュニケーターは少なくない。普段からの十分なリスクコミュニケーションが望まれるなかで、事故などのクライシス時にはなおのこと、緊急時対応は専門外であるとして、広報担当者や科学者自身が情報発信を躊躇するケースも見られる。

社会に誰がどう発信するかも重要である。福島原発事故の後には、放射線の人体影響をめぐる専門家たちの見解が大きく乖離したように映り、多くの国民が「何を信じていいかわからない」という状況に陥った。政治と科学との関係も見直さないといけないが、事故直後に枝野官房長官が発した「直ちに影響はない」というコメントは、国民に安心を与えるところか「直ちではなく後になって影響が出るのではないか」といった不安を余計に掻き立ててしまった。

一方でコロナ禍においては、会見の席で政治家の傍に立って自ら見解を語る感染症対策分科会の尾身会長の姿が目撃された。英国の科学技術顧問のようなこのスタイルには説得力があり、科学者が団結してリスク評価をしている様子もよく伝わったが、一方で、経済活動とのバランスなど、本来政治家が決めるべきことまで何でも専門家が決めるとの印象を与えてしまったと、尾身氏は当時を振り返る。

科学が大きな変革をもたらす一方でブラックボックス化した技術が複雑なリスクをもたらす社会にあって、科学と社会の架け橋となるインタープリターに求められる役割は幅広く、そして重要になっている。

HCD編

ききんの

寄付でつくる東大の未来

第83回

き

社会連携部
ディベロップメント課副課長

宮本威信

より開かれたオール東大の祭典へ



毎年10月第3土曜日に開催しているホームカミングデー。今年度は10月17日(土)に開催します。2002年の初開催から四半世紀、記念すべき25回目を迎えます。

ホームカミングデーは、本学の最大の理解者である卒業生を母校にお迎えする、年に一度の祭典です。ご友人や恩師と旧交を温めながら、母校の「今」を見て、知っていただく機会として開催してきました。近年は教職員や在学生、近隣の皆さまにも広くご参加いただいています。昨年度からは「銀杏祭」の愛称を冠し、より開かれた「オール東大」のイベントを目指し、ディベロップメントオフィスが一丸となって準備を進めています。今年度もキャンパス各所で、多彩な企画を実施します。

安田講堂では、卒業後10～60周年の節目を迎える卒業生の周年祝賀式典に加え、150周年記念事業イベントや寄付者銘板見学会を開催します。15時30分からは講堂前広場で、応援部のリードのもと、東大の歌「ただ一つ」を歌います。

銀杏並木フェスタでは、東大蔵元会による利き酒をはじめ、同窓会団体による出展、運動会所属部の体験型企画、近隣商店による飲食等販売、学生主催の企画などが並びます。伊藤謝恩ホール「赤門音楽祭」では、音楽系団体同窓会による管弦楽演奏・合唱や本郷小学校の合唱団が出演。国の名勝・懷徳館庭園も当日に限り一般公開します。その他、学部・研究科等主催の講演会、公開講座、シンポジウム、ワークショップ、東大落語会寄席など、本学ならではの企画が目白押しです。

さらに、今年度限定で、「ひらけ！赤門プロジェクト」に一定額以上の一括寄付をいただいた方を対象とした「赤門瓦記念会」を開催します。

多くの企画参加エントリーが寄せられおり、昨年度以上の参加者が見込まれます。是非、お誘い合わせのうえ、本郷キャンパスまで足をお運びください（一部企画は駒場Ⅰキャンパスで開催）。プログラムの詳細は特設Webサイトをご覧ください。

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
8月13日～	広報室	100年先の人と地球の健康のためにご支援を～プラネタリーヘルス研究機構 (RIPH) 基金 UTokyo研究室発グッツ集～演習林が130年以上育ててきた木材から生まれた箸とボールペン／『淡青』52号
8月17日	理学系研究科・理学部	合田研究室、XPRIZE健康延伸コンペで決勝進出 世界トップ10入り、さらに優勝賞金約130億円に挑戦
8月20日	本部環境安全課	第10回東京大学環境安全衛生スローガンコンテストを実施
8月20日	本部環境安全課	令和8年度「東京大学安全の日」講演会を開催
9月9日	コミュニケーション戦略本部	藤井輝夫総長がフランスの国家勲章「レジオン・ドヌール勲章」を受章

～キャンパス・ニュース①～

業務構造変革ワークショップの若手編・中堅編を実施 (業務構造変革本部)



生産技術研究所5棟で議論する参加者たち

●プログラム(概要)

ワーク① 2035年の東京大学

構造変革とは

ワーク②未来に持ち込みたくない業務・慣習

学外経験者の視点

ワーク③なぜ変わらないのか

ワーク④業務の集約化・標準化マッピング

相互レビュー (ラウンド形式)

グループで共有・まとめ

投票 (役員への提案)、講評

業務構造変革本部(本部長:菅野暁CFO)は、9月1日と2日の2日間、若手・中堅職員を対象とした「業務構造変革ワークショップ」を開催しました。

中長期的な財務・経営環境の変化や業務量の増加を見据え、個別業務の効率化にとどまらず、大学全体の視点から望ましい業務や組織のあり方を考えることを目的として、事務長会議のメンバーを対象とした6月のワークショップに続いて企画されたもので、複数部局から若手職員38名、中堅職員33名が参加しました。

当日は、「2035年の東京大学」をテーマに、将来の大学像や職員の役割について議論したほか、「未来に持ち込みたくない業務・慣習」を洗い出し、その背景や改善の方向性を検討

しました。紙や押印を前提とした手続、重複する会議、部局ごとのローカルルール、業務やナレッジの属人化など、多くの課題が挙げられ、参加者は断捨離、集約化、標準化の観点から対応策を整理しました。

最後に、各グループの提案を共有し、役員へ提案したいテーマを投票により選定しました。若手職員からは「業務を減らせないマイルド」や「縦割り」、中堅職員からは「業務ナレッジの属人化」や「会議・意思決定」などが主要テーマとして挙げられました。参加者からは、他部局との対話や将来の東京大学について考える機会が有意義だったとの声が寄せられました。業務構造変革本部では、今回得られた意見や提案を今後の施策検討に活用していきます。

～キャンパス・ニュース②～

総長の対談集『東京大学のデザイン』が出来

未来を創造する知としての「デザイン」の意義と可能性をめぐり、藤井輝夫総長が世界のリーダーたちと交わってきた7つの対談が、このほど書籍にまとまりました。従来のデザインの概念を拡張し、深掘りし、その魅力を解き明かすとともに、東大が取り組んでいる新たな教育プログラムを展望する一冊です。東大はなぜいまデザインに目を向けているのか? なぜデザインが東大にとって重要なのか? 東大の教職員として、いまこそ総長の言葉から確認しておきましょう。



『東京大学のデザイン 未来を創造する知』
藤井輝夫編、東京大学出版会、2026年9月2日刊、
A5・208ページ、2,420円(税込)

目次 |

1. なぜいまデザインなのか? [藤井輝夫]
2. デザイン教育が未来を創る [×アリス・ローソン]
3. 日本から発信する新たなデザイン [×ティム・ブラウン]
4. アートや文化を力に人とまちを育てる [×日比野克彦]
5. テクノロジーとアイデアで経済社会をデザインする [×東原敏昭]
6. デザインを通じて描くインクルーシブな未来 [×Sputniko!]
7. 複数性 (Plurality) が果たす、社会的責任 [×オードリー・タン]
8. UTokyo College of Designが導く新たな学び [×マイルス・ペントン]

～キャンパス・ニュース③～

広報誌『淡青』53号を発行 (広報室)

東京大学広報室が年に2回発行している広報誌『淡青』の最新号ができました。今号の特集は「克服のアカデミズム2026」です。失敗や危機や障壁は、単なる挫折や停滞を意味するものではありません。未知に挑む学問の世界において、想定外の事態や試練は発見や改革をもたらすきっかけでもあります。本特集では、自然科学から人文社会科学、組織のガバナンスに至るまで、大学が直面してきた様々な困難と、それらを乗

り越えるための克服と再生の歩み、そして失敗や危機や社会の障壁を対象とする学術の試みを集めて紹介。たとえ五里霧中の状況であろうともあきらめずに困難を乗り越えようとし続ける大学の姿勢を伝えます。

史料編纂所の国宝「島津家文書」から豊臣秀吉の刀狩令を取り上げる「東大の宝」、「帝大下水」マンホール蓋Tシャツを紹介する「UTokyo研究室発グッツ集」などの連載企画にもご注目を。

表紙は群馬県沼田市にある
数理科学研究科の玉原国際セミナーハウスです





CLOSE UP 令和8年度「東京大学安全の日」講演会を開催

(本部環境安全課)



(左上から) 藤井輝夫総長(開会挨拶)、井上睦子理事(開会挨拶)、廣岡知之氏、赤平理紗助教、茂木俊夫教授、岸利治環境安全本部長

本学では、平成17年に発生した本学構成員の事故災害を受けて、事故発生日である7月4日を「東京大学安全の日」と定め、事故の記憶を風化させることなく、教育研究活動における安全衛生、安全意識の向上及び事故災害の防止を図ることを目的として、毎年講演会を実施しています。令和8年度の講演会は、7月7日に「火災対策をもう一度見直そう」をテーマにハイブリッド形式で開催し、約350名の方に参加いただきました。

講演会第1部では、独立行政法人製品評価技術基盤機構製品安全センター事故調査課の廣岡知之氏から、「リチウムイオン電池の安全性と品質問題」と題して、リチウムイオン電池に起因する火災事例の紹介や発火のメカニズムや事故を防ぐための適切な取り扱いに

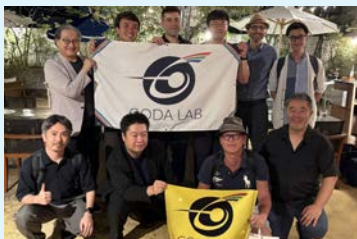
ついて講演いただきました。続いて、環境安全本部産業医の赤平理紗助教から、「令和7年度事故災害の概要報告と本学における火災事例の特徴」と題して、事故災害の分類と事故概要の解説、本学における火災事例の特徴について報告があり、各組織単位での安全教育の徹底の重要性および火災事例の特徴を認識した上で火災の未然防止に努める必要があることを説明いただきました。

講演会第2部では、同 防火防災部副部長の茂木俊夫教授(工学系研究科)から、「職場や家庭での火災・爆発一現象の理解と防止対策」と題して、火災やガス爆発災害が発生する原理やその危険要因について説明いただくとともに、発生を防止するための方法や発生時の対応について解説いただきました。



CLOSE UP 合田研究室のチームが国際健康延伸コンペで決勝に進出

(理学系研究科・理学部)



XPRIZE Healthspan研究に取り組む合田研究室および東京ライフクリニックのメンバー。Milestone 2 Awardとして100万米ドル(約1.6億円)の賞金を獲得しました

合田圭介教授が率いる合田研究室は、健康寿命の飛躍的な延伸を目指す世界最大規模の国際コンペティション「XPRIZE Healthspan」に、東京ライフクリニックとの共同チームとして参加し、8月11日、600を超える応募チームの中から決勝進出となるトップ10チームに選出されました。7年間にわたるこのコンペでは、50～90歳の成人を対象に、1年以内の治療で健康寿命を飛躍的に伸ばす治療法を実証することを目指しています。

合田研究室は、細胞外小胞(エクソソーム)

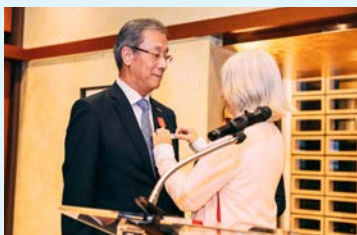
の表面を化学的に改変したスーパーエクソソームを開発し、エクソソームが内包する抗老化因子を老化細胞へ高効率に送達することを可能に。高齢マウスへの投与により、高い安全性を確認するとともに、虚弱度や身体機能などの加齢関連指標を顕著に改善し、ヒト換算で15年以上に相当する健康寿命延伸効果が期待される成果を得たことが評価されました。

2030年の最終審査に向けて、ヒトにおける10年以上の健康寿命延伸効果の実証を目指した臨床研究を実施する予定です。



CLOSE UP 総長がフランスのレジオン・ドヌール勲章を受章

(コミュニケーション戦略本部)



ナポレオン・ボナパルトが創設した名誉の勲章を駐日フランス大使から受ける総長

9月7日、駐日フランス大使公邸にて、藤井輝夫総長がフランスの国家勲章「レジオン・ドヌール勲章」(シュヴァリエ・騎士)を受章しました。長年にわたる日仏学術・研究交流への貢献が評価されたものです。叙勲式では、ベアトリス・ル・フラペール・デュ・エレン駐日フランス大使が、本学とフランス国立科学研究センター(CNRS)との連携拡大をはじめとする貢献を称賛。藤井総長は、ともに

課題に挑む営みを重ねる中での多くの出会いがこの荣誉につながったと謝意を述べました。

藤井先生は、生産技術研究所時代に日仏共同研究に長く携わり、2007年～2014年にはCNRSとのコラボによる日仏国際共同研究ラボ「LIMMS」^{*}の共同ディレクターを務めました。2021年に総長に就任した後もフランスの研究機関との連携を支援し、教育・研究分野の国際協力を推進しています。

^{*}Laboratory for Integrated Micro-Mechatronic Systems



UTokyo 秋の食卓に演習林の新しい「おはし」をどうぞ

UTCCからのお知らせ

「演習林のおはし」に新しい仲間が加わりました。愛知県の生態水文学研究所で育ったヒノキを使った新しい「おはし」です。真っ白な美しい木肌に、手作業ならではの削り跡。ヒノキの手触りや香りに加え、口当たりのやさしさも魅力です。使い込むほどに色合いが深まり、少しずつ表情が変化していくのも楽しみのひとつ。食卓に並ぶごそうと森で育った「演習林のおはし」で豊かな秋を感じてみませんか。(田)

演習林のおはし 生態水文学研究所ヒノキ



(小/21.5cm) (大/23.5cm) 各2,400円(税込)





質問の多い料理店

とあるインド料理店でのこと。友人にジャイナ教について語っていると、突然、隣の席のインド人紳士から話しかけられた。「あなたはどのようにしてジャイナ教に詳しいのですか？」と。「私は古代インドの仏教を研究していて、ジャイナ教のことも多少知っているだけです」と答えると、「なぜ仏教を研究しているのですか？」「サンスクリット語は読めるのですか？」などと矢継ぎ早に質問が繰り返された。

こちらでも質問を投げかけると、この紳士は宝石店を経営するジャイナ教徒だという。ヴェジタリアン料理店が周りにないので、ジャイナ教の同業者と自分自身のために料理店を開いたとのこと。彼はその店のオーナーだったのだ。

ジャイナ教とは、仏教とほぼ同時期、紀元前5世紀頃に始まったインドの宗教である。厳格な戒律を守ることと知られ、生き物を殺すことはもちろん、一切の肉食が禁じられる。出家者になると、一切の所有を捨て、衣服すら持たずに裸で暮らす（白い衣を着る一派もある）。

厳しい戒律を課すジャイナ教の在家信者は、逆説的に聞こえるかもしれないが、インド社会の富裕層に集中している。信者数はインド全人口のわずか1%に満たないにもかかわらず、インド政府の所得税収の約4分の1がジャイナ教徒により支払われている。その自らを律する姿こそが人々の信頼を勝ち取り、社会での成功をもたらすのではないだろうか。大学の自浄作用が問われる今、ジャイナ教における自律の力について何度も考えさせ

られた。

食後、インド料理店のオーナーが、そのそばにあるジャイナ教寺院に連れて行ってくれた。雑居ビルの中にある広い部屋には、裸身のジナ像（仏教の仏像に当たる）が鎮座し、10人程のサリーを着たインド人女性たちが談笑しながら、花で空間を飾り立てていた。オーナーは、ジャイナ教徒コミュニティのリーダー格らしく、全員に注目するように声をかけると、恭しく私を紹介してくれた。

「こちらは日本人のジャイナ教徒です」（いや、違うんだけど……）。

馬場紀寿
(東洋文化研究所)



ジャイナ教の聖地シュラヴァナベラゴラ（インド、カルナータカ州）にある、10世紀に建てられた聖者パーフバリ（ゴンマテシュヴァラ）の石像。著者撮影（2017年7月）。